

2011 年度卒業式

「贈る言葉」

公立大学法人山梨県立大学長

伊藤 洋

今日、ここに山梨県知事代理小沼省二副知事をはじめ山梨県内各界各層のご来賓のみなさまにご列席を賜り、山梨県立大学・国際政策学部卒業生 78 名、人間福祉学部卒業生 80 名、看護学部卒業生 99 名、さらに看護学研究科修士課程修了生 8 名の諸君に、学位を授与できることを心からうれしく思います。また、これらのみなさんを、今日まで支援してこられたご家族・ご親族の皆さん、また本学常勤・非常勤の教職員および特任教員あるいは本学との協働事業にご支援くださった実に多くの関係者、学外実習・インターンシップ・街づくりなどの現場でご指導を賜った数え切れない多くの県民のみなさんに心からお礼を申し上げる次第でございます。

さて、卒業生・修了生のみなさん、みなさんの多くはここで一旦学業を終えて職業人として社会に参入します。その日本社会と日本を囲む世界は今どうなっているのでしょうか？ 昨年 2011 年は、ギリシャ政府の財政危機に端を発したユーロ経済圏に激震が走りました。ギリシャ・イタリア・スペイン・ポルトガル・アイルランドと次々と危機が伝播していきました。

この危機はヨーロッパにとどまらず、世界のヘゲモニー国家アメリカ合衆国をも直撃し、返す刀で原発事故と未曾有の地震津波に見舞われた日本をも席卷しています。その結果は、空前絶後の円高と巨額の貿易赤字、そして身近には皆さんにとって「未曾有の就職難」という形で示されました。みなさんは、こういう経済の大津波の残した爪痕が生々しく残る荒れた社会の第一線に立たされるもっとも新規な参入者だというわけです。

しかし、このような困難は、こと日米欧の先進国国家群にとって昨日今日の事態ではありません。わけても日本ではすでに「失われた 20 年」という言葉が定着しているように、1990 年のバブル経済崩壊以降津々浦々に停滞感が充満しています。そして今巷間ささやかれている言葉は、このまま不活発な事態が継続していき 10 年後には「失われた 30 年」と呼ばれるようになるであろう、ということでもあります。ことほど左様出口が見えない八方ふさがりの袋小路に入ったような気分が横溢しています。しかし、問題は人々がこういう閉塞感を持つこと自体に深刻な原因を見ることがもできます。閉塞感の中にどっぷり浸かって、それが日常的なことだと思ってしまうことです。

みなさん、鶏の卵を立てたことがありますか？ あれは手を添えなくともひとりで立つとお思いですか？ それとも、人が支えないと永久に立てないのでしょうか？

卵が立つか立たないかが論争された歴史上の有名な話として、「コロンブスの卵」があります。コロンブスが、「アメリカ大陸を発見」（これを「発見」というかどうかは問題で、すでにカリブ海の原住民たちには「文化」があって彼らと遭遇したことを発見というのはヨーロッパ中心主義の視点に過ぎないという批判があります。ここでは通俗的な呼称として「アメリカ大陸発見」ということにしますが。）アメリカ大陸発見後スペインに帰国したときの祝賀会の席上で、ある人が「あなたは大陸を発見したと得意になっていますが、大西洋をただ西へ西へと航海して行ったらそこに島があったというだけで驚くには当たらないではないか？」と述べたのに反論して、「あなたがそういうのなら卵を立ててみなさい」とコロンブスが言いました。そこで晩餐会に参加していた人々は一斉にテーブルの上の卵をとって、それを立てようとしたがいかんせん卵は立たない。

これを見ていたコロンブスは「こうすれば立てられますよ」と卵の底を割って立ててみせました。そうしておいてから「このように答えを知ってしまえば誰でもできる。答えが見つからない時に何かをやるから偉いのだ」と言った、という話です。

これは、後世の伝記作家が創作した「お話」に過ぎないのですが、面白いのは、ここでは「卵は立たないもの」という前提で話が構成されているところです。「卵は自立しない」という説は、1921年文部省発行の国定教科書『尋常小学国語読本』にも「人々は何の為にこんなことをいひ出したのかと思ひながら、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。」とあることから、日本でも「卵は立たない」ということが十分に信じられていたことが分かります。

ところで、コロンブスはゆで卵の底をコツンと割って立てたことになっていますが、ゆで卵である必要も無くて、卵の底には「気室」という部分があってここに空洞がありますから、この気室を破損しないように卵の殻だけ割って立てれば卵は立ちます。しかし、そんな乱暴なことをしなくとも卵は実は立つのです。これについて中谷宇吉郎随筆集に大変面白い話が書かれていますのでそれを紹介しましょう。題して「立春の卵」です。

第二次世界大戦終結直後の1947（昭和22）年2月6日、日本を含む世界中の新聞に、まるで口裏を合わせたかのように「立春の瞬間に卵が立った」という珍妙な記事が載りました。これが、いわゆる「立春の卵『事件』」です。

中国の古い書物「秘密の万華鏡」という本に「卵は立春に立つ」という記述があることを知ったアメリカのUP通信の中国特派員が、これをアメリカ本国に打電したのは未だ日中・日米戦争さなかの昭和20年（1945年）の立春の頃のことだったようです。この当時は、硫黄島で日米の兵が死に物狂いの戦闘を行っており、ヤルタでは米英ソ三国の首脳たちが戦争終結後の対日処分を構想している重要局面にあって、アメリカですらこういう国際問題の喧騒に打ち消されて卵の話など関心と呼ばなかったようです。

ところが、戦争が終わって人々の心に余裕が出てきたのでしょうか。2年後の1947年の立春に、この記事を思い出した人々が、世界の各地で卵を立てることに熱中したということのようです。

立春とは、太陽の黄道が 315 度に達した瞬間のことです。こういう特別な時刻に何か説明できない神秘的なことが起こる。『秘密の万華鏡』の記述は実に好奇心をそそります。

日本では、昭和 22 年は 2 月 5 日が始まったばかりの午前零時ごろが立春の時刻でした。この時刻に、「中央气象台（現在の気象庁です）に若い気象学者たちが多勢集まってきて、一斉に卵立てに挑戦。1 時間で 10 個の卵全部を立てることに成功した」と翌日の新聞各紙は大々的に写真入りで報道致しました。こうして中国の古書に書かれていた「立春に卵が立つ」という「学説」が立証されました。

さて、この話はもちろん間違ってもいませんが正しくありません。実は、卵は立春の時刻でなくとも一年中立ちます。しかし、卵を立てるのには根気が要ります。この根気が問題です。

根気さえ出せば物事が成功するというのであれば人は困難に立ち向かって挑戦できます。しかし、絶対に不可能だと言われたことに対しては挑戦しません。卵は立たないという「定説」を了解した瞬間に人は卵を立てるという挑戦を止めてしまいます。こうして人類は、長いこと卵を立てるという行為を止めていたのですが、立春の時刻にだけは立つと言われると挑戦意欲がわいてきます。UP 通信の「秘密の万華鏡」の記事は世界中のそれを読んだ人々の挑戦意欲を刺激しました。そして、この日、世界中で歴史上初めて？卵立てに成功しました。

この翌日、前日の忍耐力を記憶していた人々が再度「卵立て」に挑戦してみました。すると、なんとあっさり卵は立ちました。卵は、その重心から真下に下ろしたベクトルが床と卵の有限の接触面積内に有りさえすれば立つのです。ただこの面積は卵の重力によって殻が歪むことによって生じるごく微小な面積なので、少々の忍耐でこの偶力を探するのは極めて難しく、ゆえに「原理として卵は立たない」という定説が出来上がったのでしょうか。物理学で言う「平衡かつ不安定系」という奴です。それが立春の時刻にだけは立つと賢人に言われると、人々は初めて挑戦意欲がわいてきます。そして事実このように成功したのでした。

原理として有り得ないと言われているので挑戦しないでいるものの、その原理そのものの根拠が実際は存在しない。これに類する話が、私たちの身の回りには少なからずあるのではないのでしょうか？

いま世界中の経済先進国において、特に閉塞感が横溢しています。アメリカでは「ウォール街を占拠せよ」というプロテストが昨 2011 年 9 月 17 日以来の長期にわたって行われています。日本では、巨額の財政赤字を垂れ流してきた政府が、その始末に為す術もなく周章狼狽しています。これは「卵は立たない」式の固定観念に、政府も経済界も学界も毒されてきたからではないのでしょうか？

高橋和己の小説『邪宗門』に次のようなくだりがあります。

「教団には三行、四先師、五問という根本要諦があろう。その五問というのは、特別教育をうけられたわけでもない開祖が、ご自身の経歴に即して、自分自身でものを考えられはじめたことを記念したものじゃ。・・・日本民族は頭のいい人種だという。明治維新以降だけ

を考えても、頭のいい人は山といた。それなのになぜ頭のいい秀才が世直しのことを考えず、愚直な一婦人が秀才にできぬことをなおそうとしたか。それは秀才たちがヨーロッパからいろんな制度や文物や理論をまなび、木に竹をつぐようにしてその結論だけを移植しようとしたのにたいして、開祖は解決ではなくすぐれた疑問を、自分自身で提出されたからだった。人の解決を盗むのはやさしい。カントがどう言ったかヘーゲルがどう言ったか、博引傍証の才は山といふ。思想とはなにか思惟とはなにか、それぞれの哲学者の言葉を引用して、それぞれに答えよう。だが「思うとは自分のどたまで思うこと」ということを日本人はまず肝に銘じねばならぬ。でなければ日本人はかつて禹域（中国のこと）に内面的に従属し、今またヨーロッパに追従するように、永遠に利口な猿となりはてるであろう。」

これは、とある新興宗教団体の女性教祖についての回想を教団の長老が若い信者たちに語る場面の一コマです。小説は、極貧の上、文字の読めない無学な女性が、ゆえなく逮捕された留置場であって、突如として神の靈感を受け、筆先を動かして、根本教義をつくり、やがて巨大な教団となっていくが、最後に国家に反逆するものとして白亜の教会もろとも破壊されるという物語の中で、昔を回顧するシーンです。これは、京都の綾部に実際にあった教団『大本教』をモデルとしており、ここに出てくる教祖とは大本教を創始した女性「出口なお」をモデルにしていると言われております。ここに語られるように「私たち日本人は本当に問題をどたまを使って考えてきたのか」とまともに問われると、とたんに答えに窮してしまいます。「日本人」などと集合名詞でなくとも「お前は？」と二人称で問われれば、かくいう私も返答に窮してしまいます。カント、ヘーゲルと共に「卵は立たない」式の回答に安心立命して、問題そのものを立てずにきたからに他なりません。

しかし、もはやこのような態度は許されません。答えが有ると無いとにかかわらず、問いを發する、常に發し続ける、そういう行為を続けなくてはならないのです。

今日ここに卒業を迎えた皆さんは山梨県立大学が自信を持って世に送り出す卒業生です。山梨県立大学は小さな大学ですから、教員と学生の距離が近く、それゆえに「どたま」だけでなく「足」も使った学習を相当にたくさんこなしてきたという実績があります。みなさんにはその経験を生かして、この混迷の度を深める社会に清新な風を吹き込んでもらいたい。みなさんなら必ずできると私は信じています。

皆さんの未来が明るいものであることを心から祈念しながら私の「贈る言葉」と致します。ご清聴ありがとうございます。